

コロナ派生型「XBB.1.5」、米国で感染割合3割に急増

1/7 日本経済新聞



ニューヨーク市の街中では新型コロナウイルスの検査テントが立ち並ぶ（2022年12月）

ニューヨーク=山内菜穂子 米国で新型コロナウイルスの新たな派生型「XBB.1.5」の感染が急拡大している。米疾病対策センター（CDC）の推計によると、感染者に占める割合はおよそ1カ月で4%から28%に上昇した。世界保健機関（WHO）は派生型のなかで「最も感染力が強い」と指摘し、年末年始の休暇明けの感染再拡大に警戒を呼びかけている。

WHOによると「XBB.1.5」はオミクロン型の派生型で、これまで検出された派生型で最も感染力が強い。少なくとも世界29カ国で検出されている。多くは風邪のような症状で、重症化リスクは他の派生型と同程度とみられている。

米国では2022年12月から「XBB.1.5」が広がった。CDCは1月の第1週で、コロナ感染の27.6%が同派生型だったと推計している。特にニューヨーク州など東部での感染拡大が目立つ。同州を含む地域での割合は70%を超えている。

CDCは6日、22年12月31日までの1週間の「XBB.1.5」の割合の推計を40.5%から18.3%に訂正した。

米国では年末年始のホリデーシーズンが終わり、感染者数が増加傾向にある。新規感染者数は4日までの1週間で1日あたり平均6万7000人だった。多くの人は自宅で検査キットを使うため、実際の感染者はさらに多いとみられている。

入院もじわりと増えている。3日までの1週間の新規入院者数はその前の週に比べて16%増えた。死者数は4日までの1週間で1日あたり平均390人。2カ月前に比べて10%増えてい

る。ただ、過去に比べると抑えられており、オミクロン型が流行した 22 年 2 月のピーク時の 2 割弱にとどまっている。

米国内ではインフルエンザの流行も続いている。東部ペンシルベニア州フィラデルフィア学区などの学校では、休暇明けの登校日から生徒にマスクの着用を義務づける動きが出ている。CDC はコロナワクチンとインフルエンザワクチンの同時接種を推奨している。ただオミクロン派生型に対応する新たなワクチンの接種率は接種可能な人口の 15.4%と伸び悩んでいる。

これから中国などが春節（旧正月）の大型連休に入ることも不安材料のひとつだ。米政府は 5 日から、感染を抑え込む「ゼロコロナ」政策を転換した中国、香港、マカオからの入国者に対し、搭乗前 2 日以内の陰性の検査結果の提示を求めている。